

[成果情報名] 「させぼ温州」8～10年生における生産が安定した樹の着果特性

[要約] 樹冠が十分に拡大した「させぼ温州」8～10年生における生産が安定した樹の着果特性は、樹容積1m³あたりで、収量4～5kg、着果数40～55果、葉果比30～45である。

[キーワード] ウンシュウミカン、させぼ温州、着果量、葉果比

[担当] 長崎果樹試・生産技術科

[連絡先] 電話 0957-55-8740、電子メール s26700@pref.nagasaki.lg.jp

[区分] 果樹

[分類] 指導

[背景・ねらい]

「させぼ温州」は、隔年結果性が高く、年次による収量差があり、単収が確保されていない。また、「させぼ温州」は、他の品種より葉数が多く、比較的小さい葉もあるため、葉果比も解明されていない。そこで、若齢樹の収量および着果が安定した樹の着果特性について検討した。

[成果の内容・特徴]

1. 樹容積は、樹齢5年生まで拡大、葉数は、樹齢7年生まで増加し、その後維持される（図1）。
2. 樹容積と葉数には高い相関があり、樹容積から1樹あたりの葉数が推定できる。樹齢7～10年生の平均的な樹容積5.5～6.5m³の葉数は、10,000～11,000枚である（図2）。
3. 生産が安定した樹の単位容積あたりの収量及び着果数は、収量が5～10年生で4～5kg/m³、着果数が5～7年生で25～30果/m³、8～10年生で40～55果/m³で推移する（図3、図4）。
4. 8～10年生樹において生産が安定した樹の葉果比は、30～45である（図5）。

[成果の活用面・留意点]

1. 「させぼ温州」は、8月以降での摘果を重点に、着果量に応じて摘果の時期や回数を変え、最終的に適正着果量へ調整する。
2. 生産安定樹の区分は、単位容積あたりの隔年結果指数で収量20以下、着果数35以下を安定樹、収量40以上、着果数55以上を不安定樹で区分した。
3. シートマルチ栽培で、摘果は8月下旬～9月中旬に行い、剪定は年間で15～20%程度の剪定量を毎年実施した園の結果である。

[具体的データ]

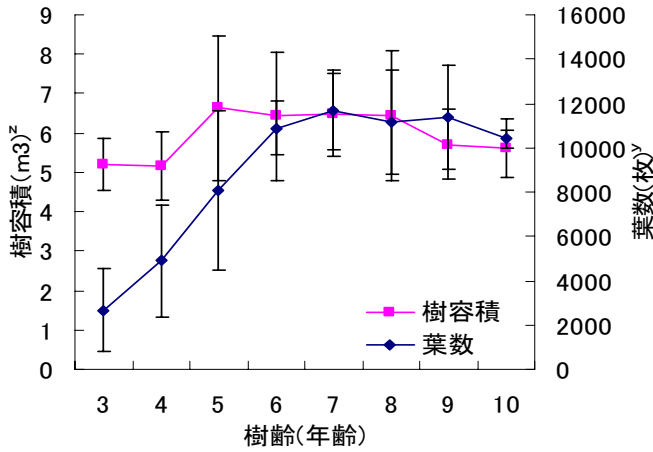


図1 「させぼ温州」の樹容積と葉数の推移(2002~2007)

² 樹容積は7掛け法(樹高×樹の縦幅×樹の横幅×0.7)で算出

³ 葉身3cm以下の葉は、2~3葉で1葉としてカウント

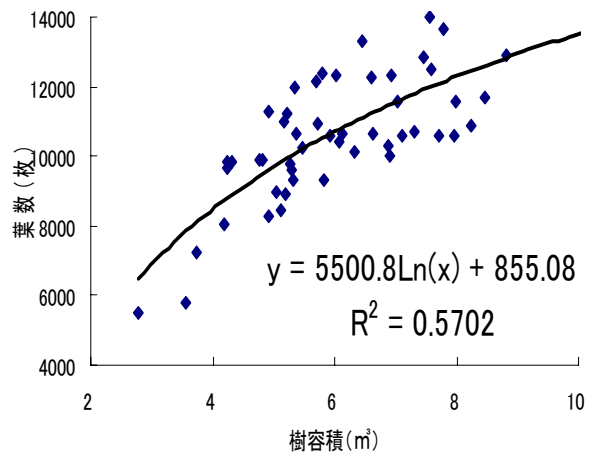


図2 「させぼ温州」の5~10年生の樹容積と葉数の関係(2002~2007)

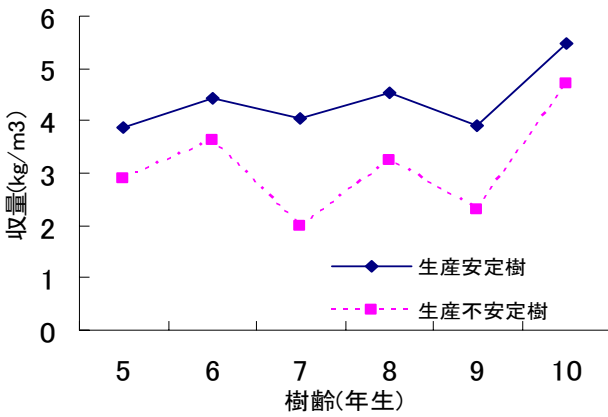


図3 「させぼ温州」の樹齢別収量の変化(2002~2007)

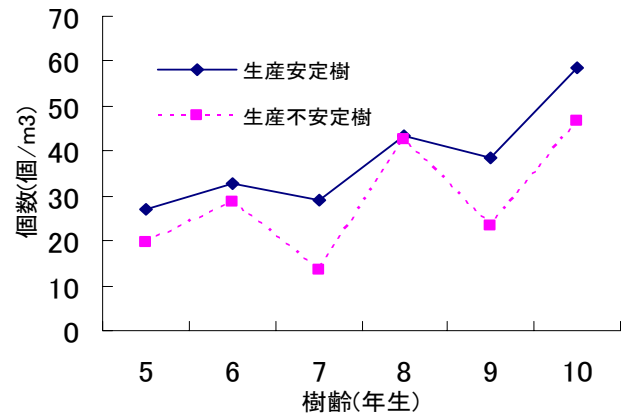


図4 「させぼ温州」の樹齢別着果数の変化(2002~2007)

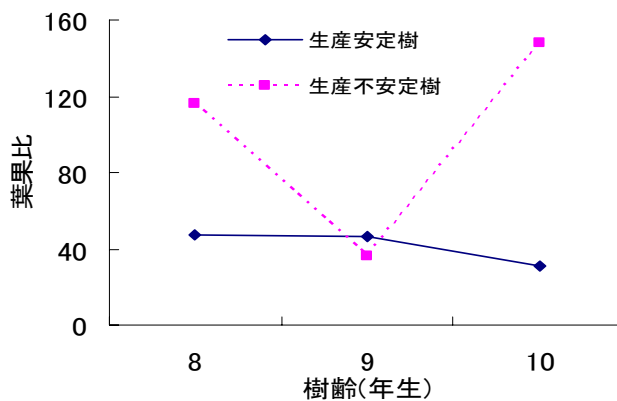


図5 「させぼ温州」の樹齢別葉果比の変化(2005~2007)

[その他]

研究課題名 : 長崎ブランド「出島の華」の安定生産技術の確立
 予算区分 : 県単
 研究期間 : 2004~2007年度
 研究担当者 : 荒牧貞幸、井手 勉、古川 忠、永田浩久、林田誠剛